【4】「ダムは芸術の象徴」

「ダムは芸術の象徴」なんてダム屋さんが聞いたら嬉しくなるようなセリフを誰が言ったと思いますか。「ヒントはわが国を代表する高名な作家の言」というと、ダム建設をテーマに「湖水誕生」などの小説を書いた曾野綾子という答えが返ってきそうですが、正解は意外にも三島由紀夫です。

三島の初期の長編作品に、昭和30年に出版された「沈める滝」というのがあります。主人公は電力会社の若い土木技師で、その彼が人妻と不倫の仲に陥るというストーリーなのですが、その少々異常な恋愛関係が小説の主題になっています。

私のような土木屋には、主人公がダム建設に従事する土木技師というところが気になりますし、小説の舞台のダムが新潟、福島県境の只見川上流にある日本有数の大ダム「奥只見ダム」をモデルにしているので何となく親近感を抱きます。

三島は、この小説を著すのに先だって、ダムの現地に出かけ、調査や現地技術者とのヒヤリングを精力的に行い、「創作ノート」なるメモ帳を作っていますが、その冒頭に「ダム（芸術の象徴）が、何ものにも関係しないといふ確信。何の関係も考へず、たゞダムの完成のみに盲ら滅法に邁進」（原文のまま）と書いています。

また、小説の中でも主人公の技師の考えとして、「・・・何人かの人間が夢中になることなしには、何人かの精神の集中と情熱と精力なしには、決して出来上がらない仕事が今日もなお存在することも事実なのだ。ダム建設はそのような意味で、一種の象徴的な事業だと思われた・・・」と言わしめています。恋愛小説なのに三島は、ダムを例にとって文庫本で5ページにもわたる現代技術論を展開しているのです。

三島はダム建設に邁進する技術者の姿に芸術家の姿を重ねて見たのでしょうか。それが「ダム（芸術の象徴）」という読者を悩ませる表現になったのかもしれませんが。

これは私の主観的な感想です。